東京ポロリ男

hisasi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東京ポロリ男

【Ｎコード】
Ｎ６２４６Ｉ

【作者名】
ｈｉｓａｓｉ

【あらすじ】
ある男　ブランドのスーツに身を包んだ、背の高い、イケメンの、育ちを感じさせる品を持った、要するにジェントルマンな男

その男が東京のある街を歩いていた。

それを見ていた少女、青年　主婦、老人、男。

彼ら、彼女らはその男を見て何を感じたのか？

あなたは何を感じるのか？

（前書き）

真面目に不真面目な事書いてみたんです。

そんな男があなたの前にも現れるかも知れません。

ただ、誤解なきように。私はそれを推奨しているわけではありません。ただ、人間の本能を、反応を表してみたかっただけです。

と真面目に書いてみましたが、不真面目に呼んでくれたら幸いです。

空は晴ればれ。
雲一つ無いほどで、日差しは結構鋭い。
抜けるような青い色は、それが確かに宇宙まで続いていると思えるほどの永遠さを漂わせているけど、そんな事考えている人はこの街には皆無だ。
探してもいない。
濁りきった海からさらってきた、粘り付くような湿度にすっかり慣れっこになっている人達は、これこそがこの国の風土だと信じて疑いもせず、そして、それが全てだとも思っていたりする。人間、自分のいるところが世界の中心だなんて思ってしまうから、世の中ややこしくなってしまうのだ。とは言え、ここに住む人が悪いわけではない。それが、人間という生き物なのだ。

そんな生き物が一千万単位で蠢く街、東京。

今日もこの街は自身の重みで一ミリずつ地球の中にめり込んでいくのではないかと思うほど、激しい動きを止めないでいる。その動きは誰が起こしているでもなく、そこにいる皆が起こしているのだが、そんなベクトルも様々な活動が集約されるこの場所を大きなスプーンですくってみたらいったいどれだけの感情が乗っかるんだろうか？この街に溢れる感情はきっとパチパチと勢いよく弾ける事請け合いだろうが、それは人によっては多いとも取れるし、少ないとも取れる事だろう。ただ、何事も精神世界においては、量よりもその質が大切という事は古今東西変わらぬ価値観といえるだろうか。この広

々とした人工物の塊の中で蠢く人間の隅々までを覗こうとしたら、いったいどのくらいの時間とエネルギーが費やされるのか、少し想像しただけでも頭が痛くなる。

まあ、とりあえず能書きは良いから、東京のある場所を覗いてみる事にしよう。

これだけなら楽しい作業だ。何しろ人間のエキスがたっぷり詰まった街なのだから、面白い事で溢れまくっている。人間の営み以上に面白い事などこの世にはいくつあるのだろうか？
ただ、どこを選ぶかと言うところでは少し悩むかもしれない。この東京という都市は場所によって色が違っている何とも纏まりの無い街の寄せ集めだから、一つ一つを区切ってみたらこれがこんなにも近くにある場所なのかと疑ってしまうほど複雑な様相をしているので、選ぶのに迷ってしまうだろう。
歓楽街。
住宅街。
蜘蛛の巣のように張り巡らされた線路に沿った駅街。
東京の血管をなす大通り沿いに立ち並ぶ街。
そして、ビル群。
後、なんだかんだ緑の公園。

そこで過ごす人間の種類もなんだか色分けされているように感じるから不思議だ。街が人の色を作るのか、人が街の色を作るのか。所詮人間は環境の子だと言ったら、簡単に済む話なのだろうか？まあ、ここではそんな難しい話を取り上げる事はしない。
哲学は目で見えない事を考えるから退屈だ。

ここに出てくるのは目で見える話。

一人の男の話だ。

その男は、東京のある街を歩いていた。

その街は相変わらずの人の多さで、皆が皆、巣の中で動く蜂見たいにせわしなくビルの間を抜けたり、そこら中に張り巡らされた通りを蠢いていたりしてている。まったく、いったいどこから湧いてくるのか知らないけど、ここ東京ではそんなに珍しい光景では無い。逆にそうでない所の方が珍しいだろうから、そんな事今更取り上げるのも野暮というものだ。とにかく、その街は人で溢れていた。駅近くの街頭では、ランダムに植えられた街路樹と共にティッシュ配りが人の流れを遮る。人の手から手へ伝えられる広告媒体は、その使命を果たさぬまま放置されたり、忘れ去られる為に絶えずせわしない掛け声とともにそこにあった。人が流れているからティッシュ配りが動いている訳ではないけど、なぜか彼らが人に群がっているようにも見えるから不思議なものだ。

あっちでは、汗かき太っちょ眼鏡。こっちでは、ガングロピアス男。笑顔と制服を貼り付けた金貸家のお嬢さんと、この日差しの中では眩し過ぎるほど目につく蛍光塗料服を着た女の子。

その誰もが一様に怪しく見えるが、それぞれは必死でティシュを配っている。仕事で作る笑顔に厭き厭きしている奴なんて、声までそれが映し出されている。まあ、受け取る方も、そいつと大して変わり映えのしない疲れ切った目をしている。

あまり多くはないが、時折自分の仕事に誇りを持っていそうなティッシュ配りがいたりする。だが、まず次の日に見かける事はない。自分の存在が勢いのみで構成されていた事を、いったい何人配った段階で気がついたのだろうか？まあ、それでも配っている人がいるのを見ると、なかなか奥が深い仕事なのかもしれない。毎朝、同じ場所で、同じ制服で、同じ掛け声でティッシュを配る若い女性を見ていると、それが朝の風景として街に刻まれるのだから。それは、

ただ通り過ぎていく人には出来ない事だ。
高校生も多いこの街。どんな時間帯でも、様々な所で、色取り取りの制服が見られるのがやはり東京という場所だろう。

この街は特にそれが激しい気がする。
場所柄だろう。制服というのは、若さの象徴と言える。
この国のカラー、東京と言う街のカラーを色濃く反映していると言っても過言ではない。一人の人にとってはある一時期にすぎないが、周りにとってはある種の階層、一つの集団として捉えられてしまう。一色多のくくり。この埋没を促進させがちな制服という階層は、それの固定化を求めるほどに中の人間を執着させたりもする。また、外の人間もそれを纏う人間に構わず、制服という外見に執着したりもする。変動しているし、固定化されている階層といえるだろう。
特に女の子では。
制服時代というのは人生で必ず多くの人が通過するポイントだ。

共通事項として人々の記憶や心に刻まれる数少ないものだろう。そんなもの、今はこれくらいしか存在してはいないのだから、ある意味一番大切なのかも知らない。ただ、その期間を過ごしているほとんどの人々はそれに気がついてはいないのだ。不思議な事に、その期間を早く通り過ぎようとしさえする。時が過ぎる事で変質する物の価値というものはこの国では重要視されない。いや、今この東京という空間ではされない。あるのは今だけだ。それが、この街に至るところにも溢れている。
周りを見回してみると分かる。時間が命と同じ意味だとしたら、まさに命の垂れ流しをしている制服姿の男と女がどれほど多い事か。

昼の三時だって言うのに、どうしてこうもたくさんの制服がいるんだ？勉強なんて言葉が辞書には無いのだろうか？
いや、彼らの中に辞書なんてアナログなモノは無い。

あるのはデジタル化された情報と、古来から受け継がれた欲望という名のＤＮＡだけだ。彼らは自分が自分の意思で選んで興味があると思っている事が実は誰かに選ばされているという事に気がつかないまま、幻想に振り回されて生きている。そして、それが何よりも楽で辛くない事だと刷り込まれて生かされている、若い肉体をもったマリオネットなのだ。マリオネットは誰に操らえているかなんて気にも留めないから、その存在を許される。
糸を切り離したら、それだけで動かなくなるのが悲しい事だが、彼らはその大切さに気が付いてやしないのだ。自分の腕に自分の糸をくくりつけるよりも、誰かの糸にくくられている事を望んでいるのだ。いや、糸の存在自体に気が付いていないだけなのかもしれないけど。

そうだ、店頭から声をかけてくる電気屋もこの街を彩る風景の一つだ。
いや、この街の電器屋は巨大家電軍団といってもいい。いくつもの巨大家電量販店が軒並み店を構える駅東口は、泥沼の戦場の様相を呈している。戦場が言い過ぎなら、非日常が繰り返される非常事態宣言地区だろうか。隣り合う家電の双璧ともいえるビルとビルの前には、それぞれの制服を着た先兵達が、目の前を通る人通る人に折伏(しゃくぶく)とも見える宣伝を繰り返している。店頭で並べられるテレビの電力とは違うエネルギーが、目を血走らせている売り子達から放たれているのだ。歩く人がそのエネルギー帯に取り込まれたが最後、強力な電磁力の磁場が作用するのか、店に入ったら手放しで帰ってきたものはいない。
まあ、皆おおむね笑顔なのだから、それはそれでいいのかもしれないが。
売る方も買う方も必死の交渉を繰り広げているさまは、この街の勢いを感じる側面でもあるのだが、また悲しい一面でもある。

執着の終着駅。

そこには欲が目で見えるほど色濃くとぐろを巻いている訳だ。売り手、買い手のやり取りにはそんな一面を感じる。まあ、それは世界中どこでもそうだろうが、この東京くらいの中途半端な湿度である空気の中だと、途端にいやらしいものに感じてしまうから不思議だ。張り付く様な欲望の余韻は、容易くは人々から離れはしないが、それが心地よく感じられるようになったらその人はある種幸せなのだろう。人は一生執着から離れる事は出来ないのだと、思い起こさせるに十分なくらいの時間を与えてくれるこの非常事態宣言地区は、この街に無くてはならないものなのだ。

無くてはならないと言えば、やはり公園であろうか。
この街には公園が至る所にある。緑と噴水のオーソドックスな公園、メタリックと石畳のアーティスティックな公園など、人々の憩いの場が多くある。ベビーカーを押して子供を遊ばせるママ達。昼下がりにランチを取るＯＬ達。甘い言葉をささやき続けるカップル。孫と遊びに来ている老人。友達とおしゃべりするためにそこに足を運ぶ老人達。なにもする事がなくて、ただ日の光を浴びに来た老人達。そして、そこを定宿として、そこに暮らしている老人達。

なんだ、見渡してみたら老人達しかいない。
比率をデータにしたものはないのかも知れないが、そこに行き見ればすぐにわかる事もある。始めてきた人がここを見れば、この街はずいぶん年齢層が高いと感じるかもしれない。

ビルに若者、土に老人。

緑と土を最終的に求めるのが人間だとしたら、どうして人はビルを作り続けるのだろうか？最終的に求めるものが真実なんだと、この

街の住人で一番よく分かっているのは、もしかしたら公園を定宿とする老人達かもしれない。

まあ、もしかしたらの話だが。

さて男の事だ。

身長は百八十センチ以上だろう。肩幅はやや広くて、がっちりとしてると言えば言い過ぎだろうが、かと言って細いとも言えない。ただ、間違いなく言える事はシルエットが素敵と言う事だ。腰は非常に引き絞られていて、ラーメン屋から出てくるサラリーマンのようなでっぷりとしたお腹とはかけ離れているし、その脚はジーンズの丈を直さなくてもいいと思えるほどすらりと長い。よく磨かれたライトブラウンの革靴は、男の品の良い顔立ちとスタイルに嫌みなくマッチしていた。

短く刈り込まれたその髪はしっかりと整えられているし、若干いい匂いもする。シャンプーの匂いだ。清潔感を感じさせる鋭い顎には、髭の剃り残しもなかったし、ましてや吹き出物もなかった。透き通るほど白いと言う訳では無いし、はたまたサーファーのように黒く日に焼けているでも無い肌は、一眼見て健康な様子が見て取れた。

年の頃は三十手前だろうか？

ぱっちりと優しそうな眼もとからは、彼の人柄が分かりそうだが、その眼の奥の光はよく読み取る事が出来ない。笑顔を作っている訳ではなさそうなのだが、何となく浮ついてる口元は見る者に緊張感を感じさせない。それに、高くバランスのとれた鼻腔は知的な印象も与えている。

まあ、ハンサムといっていいだろう。もっと言えばジェントルメン

だ。

ただ、顔はまぎれも無くこの国の顔立ちをしている。若い女性にも好かれそうだが、おばさま連中がひしめく場所に放り込まれたら、もしかしたらもみくちゃにされるかもしれない。肉体がそうさせるのか、ヴィジュアルがそうさせるのか、それとも、体から匂いたつある種の分泌物がそうさせるのか、詳しい事は分からないが、この男ならそうなる可能性はありそうだ。同時に、腕の細さに似合わない大きな手と大きな耳たぶと、広々している背中は子供達の心もとらえそうではある。子供がいる父親みたいな雰囲気はちっともしないのだが、腕の中に子供を抱きかかえていても違和感なく絵になりそうではある。ワンボックスワゴンみたいな車のＣＭに出てきそうだ。

キャッチコピーは「あなたの背中を格好良く見せる車、登場！」てな感じだろうか。

まあ、そんな車が似合いそうである。

今男は歩いていた。

男のファッションは実に型通りといえた。どこかのロックシンガーまがいのタレントのようにチャラチャラした格好では無くて、むしろ硬い感じではある。どちらかと言うと、この街とはニュアンスが違っているかもしれない。東京でももっと南に位置する大人の街向けの井出達と言えるだろうか。そこでなら埋没しがちなファッションでも、この街でならむしろ浮いている。よく言えば人目を引きやすいと言えるかもしれない。ただそれは夜の繁華街があるこの街の住人の様な感じではなく、煉瓦と噴水とコーヒーの香りが似合う感じだ。隣に女性でもいたらもっとイメージが膨れるのかも知れないが、あいにく男は一人で歩いていた。

男は上から下まで、アルマーニか、いや、バーバリー？いや、ダンヒル？とにかくヨーロッパテイストなスーツでトータルコーディネイトされており、これは確実だがイタリア製の革靴を履いていた。左腕には王冠を記したサブマリーナ、シャツの袖に光るモザイク模様のカフスボタンが御洒落を引き立てているし、タイをしていなくて、開けはなれた胸元には仄かな色気すら感じる。ラテン系の男のように、胸元にもじゃもじゃと毛が生えているなら、この街では暑苦しく感じるかもしれなかったが、男にはそれはない。ただ、きめ細やかな肌をのぞかせているだけだ。

そんな男はこの街を颯爽と、そして、何の迷いもなく歩いていた。

まあ、この東京には腐るほど人がいるわけで、この街にだって男みたいに決め込んだファッションをした「渋ちん」がいても不思議ではない。格好良いと思い込んでいる男達も含めて、この街にもお洒落で香り立つ男はごまんといる訳だ。

だから、別段この男に、見ず知らずの人達が注目する事はない。

無いのだろうけど、無いのだろうけど、特別注目する事はないのだろうけど、人々はその男とすれ違う度にその男に視線を奪われた。

街を歩くその男の前を通り過ぎる人は、男の一点を凝視したかと思うと、一瞬で全体を捉える。腕と腕がぶつかり合うくらいひしめいている場所でも、この男の前には不自然な空間が開いたりするのだ。

デパートでの買い物帰りの、お洒落な服のおばちゃん。

短いスカートをひらひらさせた鼻の丸い高校生達。

街の人の流れに飽き飽きしていたティッシュ配り。

明日を夢見て日々浪費するパチンコ帰りの大学生。

取引先に謝りに行かなければいけない新入社員。

と、それに付き合っていらいらしている上司。

明日もずっと一緒にいると誓い合ったカップル。

繋いだ手を今にも放そうとする男と女。

とにかく、色々な人が、その男とすれ違う度に注目していた。

男はすれ違う人々の興味を引き付ける何かを持っていた。
人々は男の姿を見て、確かに自分の中の何かを動かされていた。
それ自体は特別なものではない。
実は、持っている人は持っているごくありふれたものを、ただ男が誰の目にも留まる状態にしていたと言うだけではあるのだが、それでもその衝撃は人の心を動かしていた。

男は今、歩くだけで人々の注目を集めているのだ。
ただ、不思議な事に男がそれを意識しているそぶりは見られなくて、むしろ自然な感じで歩いている。

いや、むしろ堂々としているようにも見える。
足取りがそう感じられるのだ。
卑屈になるでも、縮こまる訳でもなく、羞恥の欠片も無くて、顔には感情の変化も、目の前を歩く視線への反応も無かった。まるで、注目される事の方が自然な事であるみたいにすら感じられる。皆の視線を浴びる事の方が当たり前みたいであるような・・・。

いや、注目しない人達もいた。

その男の存在など始めから興味ない人達だ。
いや、男と言うよりも自分以外の何物も興味のない人だろうか。目に入っても、どうでもいいとでも言いたげに通り過ぎる人達だ。彼らは、一瞬で感情のコントロールをする。今起きた現象を、自分の感情フィルターにかけて、自分に有益なら通過させるし、どうでもいい関係ないものだったらそれをブロックして排除する。要するに、

放置プレイだ。
彼らはこうやって、自分の世界を守ろうとしているのだ。
まあ、確かに街中にこんな人がいっぱいいたら、目に入る全ての人に興味を抱くなんて出来っこない。この街で歩いている人全てを意識なんてし出したら、五分と自分を保てなくなるだろう。取り込まれたあまりに多い情報量と、自分と言うちっぽけな存在との対比が勝手になされてしまうと、あまりにミクロな存在と言う事が分かり、その途端に自分の中の情報処理装置が限界に達してしまうのだ。
知りすぎる事の恐怖を克服しない事には、この街に長く滞在する事は至難の技になる。
東京バイブルがあるなら、まず第三条くらいに書かれるくらいの重要事項だ。まあ、多くの人はそんな経験をこの街で暮らすだけで自然と、何かしらの形で感じるものなのだ。
だから、この街の大半の人は、センサーを狭めるがごとく歩く。
ゆえに、センサーを閉じきっている人なら男に反応しない。
この街で一番センサーが敏感なのは、何も知らない子供か、どこかの田舎から出てきた何も知らないおぼこさん位なものだ。後は天才と紙一重の人達位だろうか。
要するに、この街は敏感な人には歩きづらい街なのだ。
後、中には心ここにあらずってな具合に妄想に浸りながら歩いている人は、男には気がつかないかもしれない。妄想の世界ほどこの世で一番健康的で快適な場所はないのだから、男に興味をひかれないのも納得できる。あるのは脳内で制御不能になった自身の分泌物の残骸だけだ。
しかし、一度その男の存在に気が付いた人達は、男も女も、老いも若きも、禿もモジャも、ペチャも巨乳も、漏れなく皆がその男に目線を奪われた。
それに、その反応も様々だ。
大概は大口を開ける。そして、何も言わないで見ている。

あるいは、すぐに目を背ける。
大方はこんな感じだ。
まあ、人間突然の事にはなかなか反応が出来ない事もあるし、男自体が直接の危機をもたらす訳でもないからあやふやな価値観の提示を飲み込むには、すれ違う瞬間と言うのは短すぎるのだろう。それに、面と向かって何かを訴えるには、男の風貌や雰囲気があまりにかけ離れているため、何かの偶然の結果と考える思考の逃げ道が用意されているからかもしれない。これが、うすら汚い髭面の油ギッシュメタボオヤジだったらこうはいかないだろう。歩いて、すれ違う前に事は怒ってしまうに違いない。そんな奴には、それなりの雰囲気が付いて回るから当然だ。

男は違う。
むしろ、背中を視線で追われるくらいだ。
男の後頭部に目が付いていたら、様々な表情をした人達の自分に向けられた好奇の表情に何を思うのだろうか？
まあ、それは男にしか分からない事だろう。

さて、ここで視点をある女の子に移してみよう。
そう、女の子に成り切ってみて、女の子の視点で男を見てみよう。
今、ちょうど高校生くらいの制服を着た三人の女の子達が男の前にやってきた。背格好は三人とも似たり寄ったりで、どの子も真っ白なブラウスに、水色と黒のチェック柄のスカート、そして、黒いハイソックスにローファーと言うこの街の普通の高校生だ。一人は肌が焼けていて、ブルーのカラーコンタクトが似合うちょっとスレンダーな娘で、三人の中では一番背が高い。
紺色のスクールバックを肩にかけて、左手に立ち並ぶファーストフード店の看板を見ている。茶色に染められた髪の毛が大人っぽさを感じさせるが、丸みを帯びた鼻はやはり高校生と言う感じだ。真ん中の子は背が一番低くて丸顔の、少し幼い感じのぽっちゃりさんだ。

何やら、手を大げさに動かしながら忙しなく喋っているので、元気な印象を受ける。足が少し太くなければ結構グラマラスと言えるが、ひらひらと翻るスカートのすそがおじさんの視線をとらえる位で、特に目を引くと言う感じでは無い。まあ、肩まであるつやつやで潤いがある黒髪は、彼女の健康さを特に際立たせているとはいえた。その右隣りの子は大人しそうな細目さんで、鼻の周りに少し広がるそばかすとイチゴがついたのゴム紐に括られた二つのおさげが可愛らしい、真面目そうな女の子だ。さっきから真ん中にいる「ぽっちゃりさん」の話を、頷きながら聞いている。まだ午前中の早い時間なのに三人こうして歩いているのは、繁華街の近くにある自分達の高校に向かっているからだ。今日は授業の関係で少し遅めの登校なのだが、彼女達の学校は私立の女子高なのでそう珍しい事でも無かった。周りにも、同じ高校の生徒がちらほら歩いている。正午になるにつれて人通りが増すこのメインストリートも、今は人が少ない方で、彼女達が今は主役と言えた。

さて、この三人のうち誰にするか迷ってしまうがここは一人に決めるほかはない。

よし、そばかすの「おさげちゃん」にしてみよう。と言うより、この「おさげちゃん」にしたのは彼女が一番あの男を見ていたからに他ならない。

彼女は敏感なセンサーの持ち主なのだ。

この子は中学からその学園に通っている仲良し三人組の中でも、特に奥手の方であった。性格もファッションもバラバラな三人は、昔からクラスが一緒でとくに馬が合ってはいたのだけど、恋愛観も行動力もやはりバラバラであるからして違いがある訳で、一番の違いは？と言うとその「おさげちゃん」は彼氏と言う者がいまだかつて出来た事がなかった。

以外にも、派手そうな茶髪の「ブルーアイ」よりも、「ぽっちゃりさん」の方が多くの男の事をよく知っており、今も彼氏がいた。

この年代の娘らしく「ぽっちゃりさん」が話している事のほぼ半数以上は男の子の事で、残りの大半はファッションの事なのだが、それを「おさげちゃん」は厭きもしないで良く聞いていた。
彼女の話は同じ事の繰り返しが多いけど、面白い事を言う事もあるから「おさげちゃん」はそれが好きだった。
彼女達の話に「ブルーアイ」はあまり興味は持っていなかったが、三人の中では一番男の子にモテている方かもしれない。ただ、彼女のお気に入りは、同級生では無くてもっと大人の男だ。今も、５歳年上のサーファーに熱を上げている。見た目よりも乙女な性格のようで、休みの日は朝早く起きてその彼と手弁当持参で海につきあったりもするのだ。
　それに「おさげちゃん」には想像もつかない事もすでに経験済みだし、三人の中で自分が一番大人だという自覚も持っているようだった。
こうなると、三姉妹の末妹的な存在の「おさげちゃん」は、二人の姉の教育を一身に受けているわけで、頭の中で作り上げている理想の男性像（彼女の部屋には大きなアイドルグループのポスターがある。そのうちの一人がそれだ）に縛られる自分の美意識と現実のはざまを行ったり来たりしている状態であった。「おさげちゃん」の中ではテレビに出てくる美少年アイドルと漫画の中のヒーロー以外の男は、まったく穢れた存在で狭い部屋に一緒にいるのも嫌だったし、ましてや触れるなんてけがらわしい事だとも思っていた。
　だから、内心では二人のしている事にはついていけなかったのだけど、休みの日に三人でこの街に出かけてきて、いつもの服屋に寄って、今日もなかなか気に入ったものがないやなんて少しふてくされたり、二人がそれぞれにコーディネイトする服を見て楽しんだり、自分もわいわい言いながら試着していたら頭も心も満たされるからそれでよかった。
ただ、いつか理想の相手が自分にも表れるんだとずっと信じてはい

た。

今日も、朝からそんな事を考えていたのだ。この娘の父親は石油関連の会社の社員なのだが、なかなかのお洒落でダンディであった。小さい頃から自慢の父親だったし、友達のお父さん達よりも格好良いとも思っていた。今は父親が出張中で家にいないのだけど、今日の朝、何故だか実は帰っている気がして起きてからすぐにリビングに向かってしまった。もちろん父親はいなかったのだけど、その時に頭に浮かんだのは、たぶん自分の中の理想と父親とがどこかリンクしているかもって事だ。

「おさげちゃん」には年の離れた姉が一人いるのだが、「おさげちゃん」の方が父親に特に可愛がられていた。だからか、父親の事は好きだったし、もしかしたら「おさげちゃん」が体をふれても嫌がらない現在唯一の相手かも知れなかった。そう、自分は「ブルーアイ」がいつも口癖のように言う父親の悪口を聞いていても、自身の父親の話を嫌がる「ぽっちゃりさん」の態度もなかなか飲み込めないのだ。そんな自分はおかしいのかな？なんて疑問に思いながら、「おさげちゃん」は三人並んで学校に続く通りを歩いていた。

一方、あの男も「おさげちゃん」達の反対側から、彼女達の方に向かって、余裕の足取りで歩いていた。そして、ちょうど大きな交差点で、三人と男は向きあう事になった。

長々赤だった信号が、音楽と共に青に変わり、三人は昨日だされた科学の課題の内容をくっちゃべりながら縞々の横断歩道を歩いていると、「おさげちゃん」の目に反対から向かってくる人の塊から押し出された、あの男の姿が目に入った。

背の高いカッコいい人だ。

少女の脳に男の第一印象が刷り込まれる。
距離が離れていても、たとえまだ未熟な精神とは言えども女の本能はいい男を捕らえるのだろう。
「おさげちゃん」の目は、瞬間的に男とその他大勢を分別させた。
すると目の前を歩いてくる男だけがカラーで映り、その背景は白黒にぼやけていく。少女の眼球は特殊な構造体をしているのだ。そして、一歩ごとに二人の距離は近づいていき、隣にいる友達二人の声すら耳には聞こえなくなってく。それにつれて、はっきりと男の容姿が、彼女の頭の中に刷り込まれてきたのだ。

一瞬の出来事。

「おさげちゃん」には、今や男しか見えてはいなかった。

綺麗な目。
綺麗な肌。
格好いい仕立てのスーツ。
もしかしたら、セレブレティ？でも間違いなくリッチそう。
それに、ダンディな人。パパみたいに。
スタイルも格好良いし、お洒落でそして、腰もすごい引き締まってる。
「おさげちゃん」の頭の中で、瞬間的の男の評価がはじき出されていく。少女の心のハードルはほぼ満たされたようで、自分のまだ知らない無意識の感情はどうやら鋭いエッジを利かせて熱を帯び出していた。「おさげちゃん」はもはや二メートルも離れていない位置まで男と近付いており、目は男の細部をよりよく取れようとその筋肉を激しく動かしていた。

そして・・・・彼女は見たのだ。

う、うんっ！？

おさげちゃんの目線は、ある一点で固まった。

一瞬の、思考力ゼロ。

自分の驚きと男の無表情な顔と堂々とした態度のギャップに、彼女は声も出せないままただ男から目線をそらすと、ふつふつと沸き上がってくる熱に顔を紅潮させた。すれ違いざまにもう一度だけ男の横顔を窺おうかと思ったが、少女の羞恥心がそれを許す事はなく、ただ、友達に流されるかのように彼女は男から遠ざかっていった。隣を歩く二人の友人に変わった変化がなくて、もしかしたら自分の見間違えかなとも感じられるのだが、それでも一瞬の記憶が少女に焼き付けられていた。そして、それは確かなものに違いないのだ。

あんな人が、なんで・・・？

それも、あんな、あれを。あれは、あれは昔パパにもあった・・・。

えっ、でも、パパと全然違って・・・あんな人に・・・。

少女の心にどうしようもない戸惑いが流れていたが、それでもその歩みを止める事も無く、そして、それはそのまま彼女の心の中にしまわれていった。

朝から、格好良い人に出会えたと思ったら、なんで、あんな、あの、あれを。

きっと何かの見間違いだったんだ。きっと、そう。見間違いよ。

少女はそう心の中で答えを出すと、また友達と歩いていった。

さて、今度は青年の視点で見てみよう。

場所はこの街の駅東口のメインストリート、駅から南に延びる大通りでの出来事だ。通り沿いにひしめく飲食店は大体二十四時間開いているところが多いので、いつも人がいるこの場所だが、さすがに、薬局やパチンコ屋、衣料品店などは十時頃から店を開け始める。彼があの男を見かけたのは、それらの店が丁度開店しようとしている時だった。街に人の流れができ始める時間帯であり、彼のような若者からお年寄りまで様々な人間がそこを歩いていた。

この青年は、地方から上京したての大学生で、年は十九。一浪してやっと希望の大学に入る事が出来て、この街に春から暮らしていた。肩幅が狭い、胸板の薄い体はスリムなジーンズが似合う足も相まってどこか印象的に細い線を感じさせ、黒ぶちの眼鏡はおしゃれとはほど遠いのだが、それでも彼にしてみたら小さい時から愛用してきた事もあり、容易に変えようとはしないでいた。

そう、彼はこの街に来ても、容易に自分の外見を変える事が出来なかったのだ。

まだ住み始めたばかりだから仕方はないのだけど、大学で同じ授業を受ける他の学生のキラキラとした雰囲気にあこがれる自分もいる事は確かだった。生まれて初めての一人暮らし、生まれて初めての都会での生活。何もかもが刺激的で、そして、それと同時に訪れる恐怖と不安がこの青年にある種の戸惑いをもたらしていた。

要するに、今まで住んでいた場所の記憶と、今住んでいるこの現実とが遊離して、許容範囲以上のギャップをその透き通るような心に映し出していたのだ。しかし、確実に、田舎の澄んで健康的な空気とはまったく逆の、排他的でぎすぎすして、澱んでいる、それでいて煌びやかで淫があり熱気溢れたこの街の空気は、彼にある種の陶

酔感すら与え、その純白の肺を満たして、穢れさせていた。
ただ、彼の何かがそれを許そうとはせず、それが分からないから、ただ街をぶらぶらと当てもなく歩く事があったのだ。

今日もそんな感じで、大学の休校日と言う事もあり、彼はこの街の一番大きな通りを歩いていた。まだ親しい友人もできていなかった彼は、こんな休みの日、一日誰とも口を利かない日もあった。寂しいからって、田舎にいる地元の男友達に連絡するなんて事したくはなかったし、電話帳に載っている女の名前が母親しかいない状態では、女の子に甘える事すら困難ではあった。真面目が取り柄の彼でも、女の子には人一倍の興味はあったのだが、いくら東京有数の歓楽街があるこの街に住んでいるとは言え、そちら方面には手が出せないでいた。
いや、正直言えば幾度考えたかは分からなかったのだが、金銭的問題と田舎の八十八になる祖母の言葉がどうしても頭に引っ掛かってしまい、あと一歩を踏みきれないでいたのだ。

「女は怖いど。気をつけんだど」

青年は女の怖さなどに触れた事はなかったが、その言葉の裏に潜む見えない重みは何となく祖母の目に感じすぎるほどに感じてしまっていた。大学のサークルに入ればだれとでも仲良くなれると、去年の夏田舎で会った友達は言っていたが、彼はそんな気にもなれないままもう数か月たっていた。
まあ、バイトでも始めてみるかな、とは今日の朝ふと思った事だ。
そう、新しい自分なんかを発見できるんじゃないかなんて、朝早く目覚めてしまった頭で考えていたところで、彼は少し浮ついた気分になりながら、この街の雰囲気に馴染むように出来る限りのお洒落をして部屋を出ていた。
そんな彼は、この街のこの大通りに来る度に頭に浮かぶフレーズが

あった。

「大都会東京」

今更なんて感じてしまうのだけど、古いようで的を得た表現がこの場所に来るとぴたりと当てはまってしまうから不思議なものだ。彼はまだ行った事無かったのだが副都心の高層ビル群や、東京駅周辺の近代的ビル群の方がその表現にはぴったりくるとは思うのだが、今この青年にとってはこの街の建物と、地元では見る事が出来ないくらいの人の多さでもう十分位感じられるのだった。それは、とにかく多い人の流れに未だになじめていない事位、彼にとっては素直な気持ちと言える。

そして、今何を考えているか分からないのっぺらぼうな人々が歩いているその中を、彼はお気に入りの緑色のリュックを背負って幾分窮屈そうに歩いていた。

別にこれと言って行く所がある訳では無いのだけど、この街は流石に歩くだけでも彼の興味を満たせてくれる。大型家電量販店がしのぎを削るこの街は家電好きの青年を飽きさせはしなかったし、田舎では見る事の出来ないほど艶めかしい美女達が入り乱れるデパートの中は未だに慣れないし、通り過ぎるだけで何故か緊張してしまう。特に化粧品売り場は居心地が悪いが、あの女の濃厚な密度の空気は青年の心臓を極度に圧迫するに十分だった。それに、駅前にたむろする喫煙者や、道でパフォーマンスをするアーティストなんかを見ているだけで二時間は優に時が過ぎていってしまう。

あぁ、女の子と一緒ならもっと楽しいかもしれない。

何しろ、可愛らしい服を売る店やおしゃれなカフェなどが所狭しと

あるからだ。それに、夜になればまた趣が違ってくるという事も、彼が最近知った事の一つだ。田舎にいたときには感じる事の出来ない危険が漂う空気は、自分の中に潜む何か大きな力が動き出す予感すら感じさせる。まあ、それは夜に借りるアクション物のＤＶＤが宥めてくれる訳だが、いつかこのＤＶＤに出てくるような激しい光景が自分の目で見れるんじゃないかと夢想するのだ。
それに、誰も知る人のいなことが幸いしてか自分の部屋で酒が飲み放題なのもまあ、いい点ではあった。自分は酒が強い方だとは思っていたのだが、酒が好きだとはこの街に車で気がつかない事だった。夜はいつもコンビニで二三本買ってしまうのも、最近の日課の一つだ。おばあちゃんは酒については何も言っていなかった。まあ、もし知ったらびっくりするのだろうか？
　しかし、その裏返しにある孤独を癒す一番の近道が、彼にとっては部屋で過ごす酒とＤＶＤである事は変わりようがない事なのだ。だけど、昼間はそんな事考える事はない。太陽が照りつけるこの季節、周りを見渡せば浮かれ気分の連中ばかりにすら見えてくる。夏休みが近づいてきている事も影響しているんだろうけど、彼もその雰囲気に乗って、この街を漂っている事は悪い気分では無いのだ。

なるほど、目的も無くこの街に迷い込み流れに身を任せていると、きっと自分もこの大きな渦に巻き込まれてアスファルトに散らばる吸殻見たくこの街の風景の一つになっちまうのかもしれない。ちっぽけで弱い人間が、こんなめまぐるしい流れの中で一体どんなアンカーを打ちこめるというのだろうか？

その場にとどまる事すら困難だとも言えるのに、流れに逆らってまで目的地に向かう必要があるとしたら、一体どんな場所なんだろう。今の彼には想像すらできなかった。もしかしたら、流れにそっていきついたその場所が自分の目的地なのかも、なんて思うけど、それは何かが違っていると、おばあちゃんの目に感じたような気持ちで

そう思った。

それと同時に、そんな斜に構えたことを、別に深刻に考えない限りで思いつくあたり、やっぱり垢抜けていない自分を感じていた。しかし、この街に染まったら自分はいったいどう変わり、どうなっていくのだろうか？田舎にいたころと違って、いまや東京は未開の桃源郷ではなくなっている事実。

ここにあるのはただの人の集まり。しかし、それこそがパワー。それは、いったい自分にどう影響するのだろう？

なんて思って歩いていた青年は、いつの間にか駅前のロータリーに差し掛かっていた。相変わらずの賑わいといおうか、黒い門のように形造られた駅の入り口からは信号と共に人があふれてきて、長い横断歩道を埋め尽くした。青年は駅前の大通り沿いに歩みを進めていたが、目だけはその人の流れを追っていた。別に誰がいる訳では無いのだが、自然とそうしてしまっていた。程なくして、人の波は青年を飲み込むかのように背後から押し寄せてくると、彼もその流れに乗るかのように顔を正面に向け、ふらふらと進んでいた。その時であった。

そこに居たのだ。

そう、あの男である。

青年は、十メートルほど前を歩いてくる男の、まず急に、思いがけもしないで、ある一点に視線を奪われてしまった。

それはもちろん望んでいない事であったし、まず自分の目撃したものがとてもじゃないけど信じられない事もあり、青年から五メートルほど離れている男のある一点を凝視したまま歩いた。そこまで近づいて、尚且つ自分の冷静さに幾分かの自信が取り戻せた時、青年

は始めてその男の全体像を捕らえた。
全身、青年がもち得ないほど洗練されたセンスでコーディネイトされたスーツで身を包み、顔は細めのいい男だ。雰囲気的には、まるでテレビの中の韓流スターを思わせる。もし、自分が生まれ変わるとして、今の自分のルックスとスタイルか、それとも、この目の前を歩く紳士とどちらか選べるとしたら、十回中、十回は前を歩く好みも知らぬ男を選ぶであろう。
一見したら、やはり、普通の、いや、普通以上に紳士的なこの男性なのだが、青年は思いもよらないその、その視線の先にある、常識はずれのそれに、唐突にもこみ上げてくる感情に全身を震わせた。

これが、東京か！

いや、その思いつきは、どう冷静に考えても間違いと言えるだろう。でも、上京したての青年が、街を平然といや幾分自信に満ちた顔つきで歩き回る例の男を見て、そう感じるのも無理はないのかもしれない。何しろ、この街には、彼にとって未知なものがまだたくさんあるのだから。そして、そんな思いを抱きつつ通り過ぎていく男を横目で追いながら、青年は一人行きかう人を盗み見た。誰も何事もないかのようにふるまっていたし、騒ぎ立てる人もいない。

これが東京！

青年の心にいったいどんな心境の変化が訪れたかは、誰にもうかがい知れない。
ただ、衝撃的なイメージの断片が刷り込まれた事は疑いようが無いし、それは、この後もずっと青年のイメージを支配するのだろう。ただ、それは青年がまだ若いという事があり、これからどうなるか分からない。ただ、今起きている現実をどうしようもなく受け入れる事、それ自体は仕方のない事だけども、やはり若いという事は周

りの様々な現象、様々な人物に安直に飲み込まれてしまうということなのだから仕方のない事かもしれない。
経験が無い者は表面に囚われてしまうからだ。
そして、彼が今自分を見出すには、まだ未熟すぎたと言える。
しかし、あの男の印象がこの街のシルエットとしてはっきりと青年に刻まれたのは間違いなかった。
彼は男とすれ違ってしばらくしてからも、その場に立ち止りながら青空の中で燦然と輝く太陽を見つめ続けていた。

さて、これがご婦人、しかもある程度年齢を重ねたおばさまとなると、やはりあの男の見方もそれは変わってくるものになる。女性も齢を重ねるごとに、日を追うごとに自分の中の本能に忠実になってくる。ホルモンのバランスだと一言で片づけられると、たいていのそれらの年齢のご婦人達は憤慨して、感情を振りかざし、やはり本能に忠実になっているさまを露わにしてくる。ただでさえ世界の中心であり続けたいと願うのが女性だと言うのに、齢を重ねたご婦人ともなると、すでにそうなっているかのごとく振舞いだすから手がつけられたものではない。

今日、この街に買い物をしに来ていた主婦の一人、早苗もそのようなニュアンスをもち得ている年代の一人であった。早苗はこの街のすぐ近くの住宅街に、夫と大学生の娘が二人、そして、愛しのヨークシャテリアのマリーちゃんと暮らしている、ごく普通の主婦だ。
今日は夫の五十歳の誕生日なので一人でデパートの地下にケーキを求めてこの街に来ていた。どこかに食べに行けたらゴージャスに過ごせるのだろうけど、早苗にとってそれはテレビの中の世界の事だ。
彼女がデパートの上にある紳士服売り場でプレゼントを買いがてら、ケーキを求めて地下の洋菓子店街をいろいろ見まわりながら探していると、時計はもう午後四時を指していた。たくさんのお店がひし

めく上に、そのお店にも数えきれないほどざまざまで色とりどりのお菓子が並んでいる中から一つを選ぶのは、早苗にとって楽しい事とは言え至難の技といえた。だから、色々選んでいるうちに知らぬ間に時間が過ぎていて、ようやくこの時間になって買うケーキを決める事が出来たのだ。

何かたくさんの中から一つを選ぶのが苦手な早苗は、その事でいつも夫から小言を言われる。自分の中では答えが決まっているようなのだが、決めたもの以外の物でちょっとでも他にいいところが見つかるとそちらがよく見えてしまうのだ。そうなると、決定的な決め手がない限りかなり迷う事になる。

　そんな時に夫が傍にいると、たいていは彼が勝手に決めるから迷わないで済むのだが、彼の為に何かを買うとなると、自分一人で決めなければならないからやはり悩む事になってしまう。

結婚してからは、たいていそんな感じだった。いや、結婚する前からそうかもしれない。

夫と知り合った時早苗はまだ大学を卒業したばかりで、田舎に戻るか、それともこちらで就職するか悩んでいたのだが、夫が強引に自分を求めてきたのでそのままこちらで働く事にしたのだ。あの頃は景気がよくて製薬会社で働いていた夫は、まだ若く好奇心の旺盛な早苗を誘ってよく遊びに出かけた。時代のせいなのかもしれないが、夫はよくリッチな気分にさせてくれたものだ。それに酔いしれたのは間違いない。それで、半年も働かないうちに結婚を決意した。今では考えられないくらい時代は明るかったから、その時も早苗に不安など一ミリも無く、考えていたのは夏と冬にどこの国に行こうかと言う事ばかりだったのだ。

しかし、下の子が出来てすぐにこの国の景気も悪くなり、それは夫の仕事にも影響して、夫の会社は合併、事実上リストラされてしま

った。生活もそれまでのままとはいかず、幸いにも夫の就職は決まったものの早苗にしたら想像以上の開きがあった。文句を言いたくもなったが、二人いる子供の世話は大変な事もあり、いまさら稼ぎの悪い夫と別れるなんて考えられないし、何よりどうしていいか分からないまま日々の家事に追われていった。実家が遠い事もあり育児は自分一人でやらなくてはならなかったし、仕事に追われていた夫は、休日くらいしか手伝ってはくれなかったが、それでも早苗は別に責めたりはしなかった。仕方ないのだ、二人の子供を育てる事が何よりも重要な事だと、夫婦の中で言葉で確認した訳ではないけど了解し合ったのだから。

そう、今でも生活はそれほど楽ではない。
二人の娘の学費を捻出するのに、自分も夫も贅沢な事などしたくても出来なかった。夫も今ようやく落ち着いた感じで仕事に向かっているが、食料品、ガソリン代など物価が上がりっぱなしのこの世の中だ、これからまたどうなるか分からない状況が続いているのは確かだった。なので、プレゼントと言っても一本のネクタイ、ケーキと言ってもワンホールまるまるでは無くて、小さなケーキを家族分四つ買うだけなのだ。
ただ、これが自分の誕生日ともなると何とも虚しくなってしまうと早苗は年をとる度に思っていた。何故なら、夫が自分の為だけにリッチなプレゼントを贈る事が出来ないのがあらかじめ分かっているからだ。毎月あげている小遣いも自分は把握しているわけで、夫が一年かけてプレゼント基金を積み重ねているなら別ではあるけど、その中からはどう考えても期待以上のものなど買える訳ないのだ。夜景が綺麗なレストランで美味しいワインとリッチなディナーとか、雑誌に載っているようなお洒落なバックとか流行のスカートとか、海外旅行とか温泉旅行とか、欲しかったりしたいことは山ほどあるのだが、結婚してから夫が自分の為だけにしてくれた事などないと言ってよかった。

夫はセンスは悪くないのだけど、プレゼントとしてくれるものが早苗に取って実用的なものばかりなのだ。掃除機とか、アイロンとか、食べ放題の店で家族一緒に行くとか、最近は洗濯機を買ってくれた。嬉しい事は嬉しいのだけど，なんとなく違うんだなぁと最近積み重なってきたものがあるのも事実だった。テレビドラマみたいに、大きなバラの花束をもらえたらなんて思ったりもするのだ。大体、バラなんかアイロンよりもずっと安い。

そんなニュアンスをそれとなく伝えると夫はすぐに笑ってしまうけど、ドラマに出てくるような俳優みたいに格好つけなくてもいいから渡されてみたいものなのだ。それもあるのか知らないけど、夫にプレゼントを買う時の基準が若い時と若干変わった気がしていた。つきあった当初だったら、夫の喜ぶ顔を思い浮かべるのが先であり、それから何を選ぶかを決めて、そして、その値段を見たりした。しかし、今はまず値段から見てしまう。自分が主婦になり、母になり、年を取ったことと関係しているのかも知れないけど、夫の気持ちが反映されているのも間違いはないはずだった。夫が自分を喜ばせるような何かをしてくれたら、自分だってそれにお返ししようと言う気になるというものなのだ。だから、夫には花やら綺麗な何かを送ってほしいと、早苗は思っている。

その気持ちを馬鹿にされたりしたら頭にもくるし、隣の奥さんでは無いけど昼間やっているメロドラマみたいに外で若い恋人に熱烈な気持ちをささげてもらいたいなんて、今日みたいな夫へのプレゼントを買ったりする日は頭の片隅に考えたりもしてしまったりする。ワイドショーや女性週刊誌では無いけど、そう言った危険な主婦の話を聞くとあながちウソでは無い事だと思う。自分だって何か切っ掛けがあればそうなる事もあながち不思議では無いのだ。

まだ四十五だし、スタイルだって大学生の二人の子持ちにしては良い方だし、それほど昔と変わってはいないとも言える。近頃は、自分くらいの年齢の女性がもてはやされているらしいし、もしかし

たらどこかの若い男の子が自分を密かに思ってくれているかも、なんて早苗は思ったりする事もあるのだ。実際には無いにしても、その予感にふと浸りたくなる時があるのだ。

だから、今日みたいにデパートに行くときなんか結構お洒落に決めたりもするし、二人の娘からも最新のファッション事情を聞いたりもする。年頃の娘は二人ともお洒落には余念がなくて、クローゼットの中は洋服でいっぱいだ。年が近い事もあるせいか二人の趣味が合うらしくよく着回しをしているようで、早苗もそれに加えてもらう事が多かった。スリムな早苗が娘の服もまだ着れるから出来る事ではあったが、それでもやっぱり自分には若いと思う服は着る事が出来なかった。娘は勧めてくるのだけど、やはり自分には自分の趣味があるからそれは仕方無かった。

まあ、娘もそうではあるけど、今の若い子のファッションはすごく種類が多様化していて、自分が今娘と同じくらいに生まれていたらものすごく迷ってしまいそうだ。そう言えば、若い時はジュリアナ東京では無いけど、流行りがあれば皆それを真似していた気がする。

自分だって、トレンディドラマみたいな髪形や、服装をしていた時もある。あの肌に張り付く様な、派手な服も二三枚持っていた。今だって、流行があればそれに乗っかる女の子がいるだろうけど、様々な流行に様々な趣味の女の子がそれぞれに乗っかるみたいで、まとまりがあるようには思えないから、全ての女の子がみたいな感じには思えないのかもしれない。

それが、今誰もが主張する個性って言う事なのかもしれないなんて思いながら、早苗はオレンジの光がまぶしドアに反射しているバスに乗ろうとしていた。

そんな時だった、彼女はあの男を目撃したのは。

早苗は買い物袋と、ケーキの箱を重たそうに持ちながら、大きな

公園がある西口のバスロータリーまで歩き、丁度乗り場に滑り込んできた自宅方面に向かうバスに乗ろうとしていたのだが、先に待っていた何人かの乗客の後に続いて歩いていると、ふと近くの公園と劇場の間の広い空間に男が歩いているのが目に留まった。

男は午後の光に照らされて、その空間から浮き立っているように早苗には捉えられた。背の高い青年で、上から下までスタイリッシュな服装でまとめられており、一度だけ主婦仲間と入口まで見に行った事があるホスト達とは少し違う色気を漂わしていた。いつも人通りが多いこの公園も、この一角だけは人がまばらであったせいでこの青年が目立っているんだわ、と早苗は思って一度目線を逸らしたが、やはり何かその男が気になってしまい、また視線を彼に戻した。男はまっすぐに、ゆっくりとバスターミナルに歩いてきて、徐々にその姿を明確に表してきた。彼の顔を見た瞬間、早苗は心に衝撃を感じた。

間違いなく、いい男であった。

優しそうな眼はメロドラマに出てくる主役のようでもあるし、高く形の整った鼻はヒロインを主人公と取り合うライバルの鼻その物なのだ。引き締まったおなかは、たるみきった夫のものとは明らかに違うし、遠くからでも体から放たれる香りが漂ってきそうなほど清潔感を感じられた。自分の目の良さを嬉しく思いながら、同時に心の方も年をとっていない事に早苗は少し震えた。彼をとらえてから、後から並んでいる乗客に押される様にバスに乗り込むまで、早苗はなるべくその男から目を離さないで見ていた。バスは時間までしばらく待っているみたいだし、窓際に座れた早苗は彼を見る時間は十分にある。

気がつくと、もう口元の動きまで見てとれる距離まで近くにいる。

笑っている訳ではないけど、口元が上向きなのは性格がいい証拠じゃないかしらなんて思ったり、夫とは比べ物にならないほど生えそろった髪の毛にうっとりとしながらしばらく見入った。そして、バスのエンジンがかかりドアが閉まった時、早苗は彼のある一点に視線を集中させた。

「あら、まあ！」

こらえきれず、早苗はそう口にしてしまったが、バスが走り出した音でそこ声はかき消された。ただ、早苗は窓によじりつき、その男を目で追った。

男はバス停のすぐ近くをバスの進行方向とは逆に歩いており、すぐに早苗の視界から消えてしまったが、彼女の眼にははっきりと男の姿が焼き付いていた。

男がさらけ出していたところをはっきりと自分の目で見た事が、一瞬現実だとは思えないでいた。なので、男が視界から消えた後は、座席に深く座りこみうなだれるようにして目を見開いていた。しばらく考えたが、今見た事は現実だと言う事しか分からず、後は真っ白になってしまい整然とした思考で考える事が出来なかった。まさか、こんな街中で、あんなものだして歩いている人がいるとは思いもよらなかった。それは早苗の中の常識の範疇をはるかに超えている光景だったのだ。

そんな早苗の気持など考えないままバスはロータリーを回り、大通りへと続く交差点に差し掛かった。信号が赤に変わり、駅に行く人、駅から出ていく人が交差点を交差していくのだが、早苗が恐る恐る顔をあげてみるとそこには、さっきの男がいた。

「ひぃっ！」

早苗は小さく空気を口から漏らしたが、眼だけはよく動き今度ははっきりとかなり近い距離から男のある一点に視線を集中させた。もう、今更男の容貌やスタイル、ファッションなんてどうでもよくなり、ただ、日の当たる内の世界での常識外の事に心をとらわれる他早苗が出来る事はないと言ってよく、そこには塩の一つまみも迷いも無かった。男は早苗に見られている事に気がつきもしていないし、視線を感じている素振りすら見せずに悠々と人波の中を、駅とは反対側に交差点を渡ろうとしていた。縞々模様が書かれた五メートルほどの区間、早苗はその男を出来る限り目で追いながら、なぜか罪悪感に襲われていた。

その罪悪感の根源は、明らかに性への欲求であった。

その男の持っているものからくるのは明らかで、そして、それはその男と比べている対象、要するに夫への早苗自身の感情が交差して生じていた。その男の持ち物は、明らかに「ご立派」であり比べた対象よりもずいぶん見栄えがするものであった。何より、早苗が見ていた時それはいきり立っていたのだ。早苗の中の女が、あれを見た習慣瞬時に沸騰したが、それと同時にある種の恥じらいが沸き起こった。早苗ももう二児の母であるわけで、大学時代にそれなりに男と遊んだりもしていた訳だが、結婚してからは夫のものしか知らないで生きてきていた。もう、二十年以上もそうなのであるからして、男の子供がいない早苗にとって夫以外の生のあれを見るのは久しくない事だったのだ。

だから、余計に反応してしまった。

そこに破廉恥だ、犯罪だと言う冷静な感情や考えよりも先に早苗の女が反応していたことに、自分自身驚いていた。そして、そこに早苗は罪悪感を感じていた。

何しろ今日は夫の誕生日なのだ、夫以外のあれに反応する妻が自分

だと言う事は、妻として失格なのだはないか？
そう感じたのだ。
世間でのそんな女の事を面白がりながらも、早苗は自分はそうでは無いと言う事にある種の優越感を感じていたのに、これでは一緒になってしまう。一瞬でもそう感じた事が、許せなかったのだ。そして、羞恥心がそれに乗っかってきた。
自分は二人の娘に「男には気をつけるように」と散々言っておきながら、目の前を歩くあの男のあれに、一番興味をひかれた自分がとてつもなく恥ずかしい存在に感じられた。

自分が女であり、その欲求を豊富に持ち得る事を自覚したら、誰が一体それを止められるのだろう？

それは娘も同じだし、そして、自分自身もそうなのだ。目の前の男のいきり立つあれが、その現実を早苗に突き立てているように感じられたのだ。これから、自分は娘に何と言ってあげればいいのだろうか？
信号が変わりバスが走り出すと、男は早苗の視界から流れるように消えていった。そして、見えなくなると早苗は窓に頬杖をつきながら、外の景色をただ流れるままに見た。景色が目に映るが、何があるか分からない。

ただ、頭の中では夫の事が浮かんでいた。

あの男が見えなくなってからすぐに夫の顔が浮かんだ。そして、夫の記憶。考えてみれば夫はよくやってくれたと思う。一生懸命だったし、自分の事を大切にしてくれた。あの男のようなものは持ってはいなかったけど、それはそれで早苗は満足していたし、それ以上に大切な気持ちが自分の中にある事が、その時になって改めて気がついた。

早苗はケーキの箱を持つ手に少し力を込めながら、一人目を閉じると口を緩めてほほ笑んだ。

さて、街をぶらついているその男を見た人間の中に、もちろん年寄りも何人もいた。そう、齢を重ねに重ねたおじいさんの視点に立ってみれば、その考察も興味深いものになってくる。男を見た老人達の中には、ちらりとしか見ないで別に気にしなかった人もいたが、やはり、それをまじまじとその目に収め、考えを頭にめぐらした人もいた。

この街で靴を売って四十年、恩年七十五歳になる木村靴店の店主木村徳三がそうであった。徳三じいさんはいつものように店の前に腰掛けながら、最近ちっとも売れない靴を社会のせいにしながらも、もぞもぞと入れ歯を口の中でずらしながら、すっかり変わってしまった前の通りを眺めていた。ここは駅前ということもあって人通りはかなりあるのだけど、駅の反対にできたチェーン展開する激安の靴屋屋、出来てから特に変わり映えする事が無い店の古さなどもあってか、靴屋に寄っていくお客はまばらであった。要するに、じいさんの店は繁盛している訳では無くて、じいさんが店番できるほど暇だったのだ。

徳三じいさんは店先に置いてある自分専用の背もたれのある椅子に腰掛けながら、まだ若かりし頃、戦後復興して活気づき始めたこの街の人間が自分のところの靴を買っていった懐かしい光景を思い浮かべながら一人溜息をついた。あの頃は人も街もそりゃあ汚かったし、何にもなくて誰もが余裕も無くて貧乏だったけど、それでも一人一人が強くてしたたかで活気があったし、何よりもその目がギラギラと強く光っていた。だから、相手にするこっちも張り合いがあって、同じように目をぎらつかせていたと思う。じいさんだってその頃は、命が手に取れるような緊張感と、明日をも分からない不安

を乗り越えるだけのバイタリティで毎日が満ち満ちていたのだ。

しかし、今はどうだろう。

じいさんから見て、この街と人からその時のような熱を発しているようには見受けられないのだ。月日が流れるにつれて、自分も年をとったからそう感じてしまうのもあるが、それ以上にこの街が年をとってしまったように思われる。そう、あの時のギラギラが今はどこにも見えなくて、すっかり無くなってしまっていた。この街も人も、そして自分自身も、今座っている椅子のように足はガタつき、塗装は剥がれ、背もたれを止める布もすっかり綻んでいるかのようだ。

いや、確かに違う意味でギラギラはしているかもしれない。あれから、店の近くには歓楽街ができ、いくつもの水商売の店やらパチンコ屋やらが出来て、信じられないくらいのスピードであれよあれよという間に周りはビル化され、徳三じいさんの靴屋だけが取り残された形になった。ある時期にはひどい地上げにあいそうになったが、それでも何とか店を維持出来たのは贔屓にしてくれたお客様あってのことで、色々力になってくれる人がいたからだ。

そりゃあ、派手で賑やかな事は商売の邪魔にはなりはしないのだけど、こう街の色が変わってしまっては、年老いたじいさんとしては居心地がいいというものではない。まあ、それは時代の流れと言ってしまえばそう言う事なのだろうけど、何かがすっぽりと失われていく感じがどうしても拭えないのだ。大切な何かが。

それに、この不況だ。

東京でも有数の繁華街を誇るこの街でさえちっとも羽振りがいい客なんていやしない。

誰もかれもが皆小さくまとまっちまって守りにはいってる。金を使

うのは亭主の稼ぎの良いおばさん連中くらいになっちまった。この街に来る男は押し並べて皆どうしようもなく弱弱しいメダカみたいに見えるし、まるで捕食者に食べられるために生きているかのような力の無さを、徳三じいさんは感じてしまうのだ。
まあ、女が強いのが伝統的なこの国の形なのかもしれないが、大正生まれの徳三じいさんからして見ればやはりしっくりこないのだろう。街を歩く軟弱な若者を見ると、ついそう思ってしまう。この国はいったいどうなるんだなんて、考えたりするのだ。
でも、徳三じいさんがそれの気持ちを表に出す事はなかった。

今更自分が何ができるというのだろうか？

そんな事を思いながら、夕暮れ時の薄暗くなった町並みを眺めていた時、じいさんは目撃する事になる。

そう、あの男の姿を。

男は、あのダンディでジェントルマンな男は、木村靴店の前の横断歩道の信号待ちをしていた人の塊の中にいた。帰宅ラッシュや、買い物ラッシュが重なり、駅前のこの店の前もかなりの人がいたので、じいさんはあの男にはすぐには気がつかなかった。店の目の前を走る二車線の道路は、西と東を結ぶ橋に続く車の通り道と言う事もあって交通量が激しいからなかなか信号が変わらない。その事はいつも感じてはいた徳三じいさんは、ただ何となく意識もしないで変わっていく信号を眺めており、その日も信号は普段と同じ間隔で青に変わった。すると、それを合図に動き出す人の塊が動き出した。
いつもの光景を、いつものように眺めていた徳三じいさんの目の前で、いつもとは見慣れない光景が映し出された。

一人の人物の前で、人の塊が、さっと割れたのだ。

そう、あの男である。

男は駅を背にして横断歩道の正面に位置する木村靴店に向かって歩いてきていた。ここは丁度人の流れがぶつかるところにあるからそれは不思議では無いのだけど、なんと男がその道路を渡ろうと歩きだすと駅に向かう人の流れが道を譲るがごとく男の前で二つに割れていったのだ。それは、モーゼの前で割れた紅海のようであり、男の前で開かれた道の先には、木村靴店の赤と白の縞模様の廂とその男を食い入るように見つめる徳三じいさんがいた。

男と徳三じいさんの間にはこんなに込み合っているにもかかわらず、誰一人としていない不自然な空間が出来たのだ。

だから、勢い徳三じいさんの視線は男に注がれた。

正直、初めのうちは徳三じいさんの目ははっきりと細部までその男の姿をとらえているわけではなく、おぼろげといってよかった。何しろ、もう年なのだから遠くのものはよく見えないのだ。

しかし、その男が店先の庇のすぐ下に座っている徳三じいさんの本当にすぐ傍まで来た時、じいさんにもこの男の細部までがしっかりと認識される事となった。そして、じいさんは男のある一点にしっかりと気がついた。

そう、じいさんは見てしまったのだ。

「こりゃ、たまげた！」

じいさんのファーストインプレッションはそれであった。

歩き続けている男は、ほんの二、三秒じいさんにその雄姿を正面から浴びせていたが、歩道も中ほどまで進んでくると靴屋の左手に進んでいった。

しかし、この時、男は不意に反転した。

当然、爺さんの目線も反転する。

男は、思い直したように踵を返した足を靴屋の右手に向けると、若干きりりとした表情を浮かべながらその歩みを進めた。自分を目で追っている老人の視線などもろともくれず、その歩きは、そう、紳士的であった。むしろ、雄大ささえ感じさせるくらいだ。

さて、ファーストインプレッションから、男が店の前を通り過ぎ、また横切って去っていくまで、徳三じいさんの目は男の一点と、そして、その顔に注がれていた。

この男の存在が、反応が鈍り気味の脳細胞をそれでも精一杯の早さで活動させて、じいさんに驚きのサイレンを鳴らしたのだ。

年を取ると、案外事実を受け入れられなくなる。頑固になるからだ。

しかし、じいさんはその事実をすんなりと受け入れる事が出来た。

まあ、当然と言えば当然で、自分の目で見たことは、それは自分にとって事実以外の何物でもないわけだから受け入れる以外にいったいどうすればいいのだろうか。年をとると、確かに、都合のいい事しか受け入れなくなるものだが、徳三じいさんは商売人だけあってリアリストなのだ。

ただ、その反応の答えは意外なのものだった。

男を見たじいさんの結論は、ある種の敗北感だった。

非現実があるが故の現実。

非常識があるが故の常識。

自分の中の現実と常識が、あの男の存在から来る非現実と非常識を混入され、混ぜこぜとなった事で、自分の中にある非現実と非常識がむずむずと頭をもたげて、台頭してきたのだ。じいさんにとって、それは思いがけず、そして、唐突な出来事であり、反応だった。誰しもが持ちえる願望を、常識という固い殻で覆いかぶせて一体幾年が過ぎたのだろうか？

自分が常識人になる事に抵抗もなければ、疑問だって持ち合わせてはいないのだけれども、それでも、何かをなくしたのではないかとも感じられる。だからと言って、今更積み上げてきたものを取っ払ってしまい、今から新しい事をしたい訳でもない。

ただ、今自分の目の前を歩いていた男は、明らかにじいさんのある種の感情を刺激した。

要するに、じいさんに無いものがあの男にはある、と感じてしまったのだ。

じいさんの中でそれは・・・・。

そう、自由だった。

颯爽と歩くあの男に、じいさんは清清しい位の自由を感じていたのだ。

そう、この街の、今という時代の閉塞感に、いま目の前をぶらりと歩いて行った男が、一点の風穴を開けたように感じられてしまったのだ。なるほど、これが冴えない酔っ払い親父の行動なら、徳三じいさんと言えども、こんな感情は湧きあがってはこなかったのかもしれない。

しかし、目の前を歩いていた男はどう見ても紳士であった。
ある一点を除いて、徳三じいさんと変わらない常識人と見受けられたし、端正な容姿からは品性すら感じられもしていた。徳三じいさんだって、若かりし頃を思い出せば、一張羅を着た自分の姿を思い浮かべてみれば、彼にもそれほど引けを取らなかったかもしれない。

しかし、彼の様に颯爽と、街に「自由」を見せつける事が、果してできただろうか？

じいさんの答えは、あの男を見た瞬間に出ていた。

「自分には無理な事・・・だ」

この思いが、じいさんに敗北感を与えていたとすれば、他の人から見ていささか常識外れとも受け止められるが、じいさんにとっては直観的なものだった。捕食者を前にした獲物の気分と似た敗北感といったら大げさだろうか。まあ、自分のやはりそっちら側の人間になり下がっちまったと言う訳なのだ。

嘆いていた方が、実は嘆きの対象と言うこの事実。

じいさんはしばらく店の前の椅子に腰かけて、今目の前を通り過ぎた見も知らぬ男の影に覆われながら、ただ、その敗北感に打ちひしがれていたのだった。
しばらくして、じいさんは一つ息を吐き吐き出すと、坐っていた椅子からゆっくりと腰を上げた。

「あれ、どこ行くの？」

店番をしていた末息子がいつものじいさんらしからぬ動きに声をかけてきたが、徳三じいさんは疲れたような声でそれに答えた。

「トイレだよ」

徳三じいさんは腰に手を当てながら、下を見つめ、そして、もう一度溜息をついた。

もうすっかり暗くなり、店の明かりや街灯がその強い光を放ちだしたこの街で、一人の男が歩いていた。
その男は、背が高く、上から下までヨーロッパテイストのスーツで身を包み、ダークブラウンの革靴の踵から音を鳴らして歩いていた。
端正な顔立ちは韓流スターのようで、その引き締められた体は服の上からもよく分かるほどだった。綺麗にひげをそられた口元に自信を漲らせていて、見た感じリッチでスタイリッシュな青年に見えた。
皺の無いブランド物スーツと、左腕に光るサブマリーナはその男の端正な顔立ちを良くひきたてていた。

男の名前を田辺と言う。

田辺はこの街の西にある繁華街を抜けた裏通りを駅と反対方向に歩いていた。
田辺がこの街に来たのは女に会う為だった。とびきり極上とまでは言えないけど、少なくとも写真上ではいい女に見えた。彼が待ち合わせているのは「セレブパーティー」というインターネットのサイトで知り合った女で、今日が初めて会う日だった。
会員制のそのサイトは、セレブな出会いを求める男女が押し寄せる秘密の社交場と化しており、本来なら限られた人間しか入会できない訳なのだが、田辺はそこに通じる秘密のパスを入手していた。

彼は最近まで地下にあるバカラ賭博場によく入り浸っていたのだが珍しく馬鹿ツキして懐を温めていた時に、金と引きかけにそのパスをある会社役員から入手したのだ。

そいつは背が低く、腹に肉があり、薄くなった髪の毛を横に撫でつけ、脂ぎった鼻の上にふちなし眼鏡を掛けており、一見普通のオヤジなのだが、来ているスーツや身につけているものはそう見えなくもなく、自分の口で会社役員だと言っていたから、田辺はそう思っていた。

まあ、ここでは店に来た同士お互い深い事まで知る事は無粋だし、必要もない事だからそれを気にする事はなかったし、何しろ自分の事だって本当はただのトラック運転手なのに、「運送会社の跡取り」だなんて嘘八百並べていたのだからお互いさまなのだ。ここでは金とバカラが全てであり、その人の背景など大した価値はない。

田辺は年の離れたその役員の事が嫌いでは無かったし、会えばいつもとりとめのない話をする位の仲であり、この場所に会う人間の中だったら唯一気の許せる相手だった。
とは言っても、その会社役員と知り合いになった期間は短いものではあった。

この場所は地下の中でも特に人の流れ、入れ替わりが激しいからそれは普通の事だ。顔を見かけても話をしない人間の方が多いし、堅気も少ないから、田辺から見たらほとんどそういった関係になってしまう。その自称役員も一緒だ。彼はバカラは初心者らしく大きく勝った為しがなかったけど、どこから出てくるのか店に来る時は威勢よく札束を積んでやってくるのが常だった。
ただ、しばらく顔を見せなくなったなと男が思っていたある冬の日、彼がひょっこり店に現れた。何故かやつれたように見え、暗い顔を

していた彼だったが、田辺を見つけると弱弱しく笑みを向けながら近づいてきて話しかけてきた。

「儲かってるみたいだね」

そう言ってメガネを噴いた彼は以前より確かに痩せているように見えた。

「今日はかなりツイてるんだ。流れが来てるんだろうね」

田辺はそう言うと、グラスに半分ほどあったスクリュードライバーを一気に飲み干して、充血した眼を彼に向けた。すると、彼は頬を流れる冷たそうな汗をそのままに、田辺の服の左袖を引っ張った。何かを訴えているような眼に、田辺はただならぬ気配を感じて一瞬心の中で身構えた。

人間の何をしでかすか分からない目は幾度となく見てきていたが、この会社役員の目はそれと同じ色であったのだ。

「ちょっといいかな？」

彼のその言葉に、田辺は無言で頷き、ゲーム台から離れると彼と二人で賭博場のトイレに続く廊下に向かった。隅に瓶ケースが積まれ人気のないその廊下に来ると、彼はおもむろに口を開きだした。

「そのツキ俺にも分けてくれないか。百万くらい勝ったんだろ？その半分、いや三十万だけ俺に貸してくれないか。必ず返すから」

彼の必死の形相に、田辺は言い知れぬ恐怖の予感を感じた。断る事の方がこの場でも、後でよく考えても正解だった気がしたが、田辺はあえて間違いを犯した。

何も言わずに、手持ちの三十万分のチップを彼の目の前に出したのだ。
すると、彼の眼の色が瞬時に変わり飛びつかんばかりの予感を発していたが、そうはしないでただ一つ息を飲むと、ゆっくりと男の手に自分のかすかに震えた両手を伸ばしてチップに触れた。
そしてその時に、彼は「セレブパーティー」の話を持ち出したのだ。

「これは、お礼みたいなものだが、君に教えてあげるよ」

そう言って彼はそのサイトのあらましを田辺に説明した。そこは金持ちの男が集まる会員制の集まりで、選び抜かれた美女達だけがそこにアクセスできる仕組みになっているシステムになっているらしく、火遊び目的の女や金目当ての女がよく捕まると言う事だった。男性会員は限られていて、コード番号が相撲の親方株のように売り買いもされるらしかった。彼が言うには、そのコード番号を田辺に譲ると言うことらしかった。パスワードさえ分かれば、アクセスしてすぐに名義変更できるらしい。

言わば、そのコード番号が一種の信頼とブランドとステータスを作り上げているらしかった。

おかしなことをすれば、すぐにすべての会員に影響するわけで、会員なら誰もがそのこと認識していると言う信頼がそのシステムを守っているらしい。彼は、自分はしばらくそこのお世話にならないから、君が使うと言いとだけ言い、それらの全ての情報を書き込んだ用紙の入った封筒を男の手に握らすと、三十万を握りしめながらバカラのゲーム台に歩いていった。その背中はやけに小さく見えたが、男は事態をよく飲み込めないまま見送る事しか出来なかった。

その日、彼は全てをすったらしい。

しばらくして、大手生命保険会社勤務の課長が横領の罪で起訴された記事が新聞のニュース欄に乗り、逮捕直前に自殺した事が後でそれに加わった。テレビでもニュースとして流れたが、その犯人があの会社役員だった事を、田辺はしばらくしてから知った。
しかし、彼の興味はすでに違う事に向けられていたから、それほど気にはならなかった。
そう、田辺はあの自称会社役員から譲られた「セレブパティー」なるサイトにはまりだしたのだ。
ここでは、ただのドライバーの自分が「運送会社の跡取り」として広く女性達に認知されており、見栄えもする顔立ちの彼はサイト内で引く手あまたの存在となっていた。何しろ、金を求めて群がる女は数知れないわけで、チャットでやり取りする時もちょっとおべんちゃらを使い、在り来たりな優しさを伝えるだけで女はすぐに信頼を示してくれるのだ
。その背景には、ここのサイトの信頼性が十分に発揮されているからであり、要するに女達の警戒心のハードルが著しく下がっているからなのだが、それでも彼は今まで感じた事のない自分の力を錯覚しながらも、それを上回る高揚感で女性達に会う前から有頂天になっていた。
まあ、実際、田辺に足りないのは金とステイタスなのだ。
この場所ではそれが保障されているも同然なわけで、彼はいかんなく、そして自信を持って自分を発揮する事が出来た。だから、仕事が終わればすぐにパソコンの前に坐り、書き込みをしながら暗いワンルームの中で一人ほくそ笑む生活が続いた。何人もの若くて美しい女性達とやり取りをしあい、ある事無い事適当に書き込んでいれば、容易にカタルシスを味わう事が出来るのだからこれほど便利な娯楽は無かった。どこから手に入れたのか知らないが、きっとあの自称役員もそんな感じを味わっていたのだろう。
ただ、彼は実際に女達に会ったりはしなかったはずだ。あの役員が

そのまま彼女達と会ってうまくいくはずはないだろうし、きっと写真だって本物を使っていたかはあやしいものだ。
まあ、実際はどうなのか知りもしないが、田辺はと言うとそれだけでは満足できなくなり、すぐに実際に女性達と会いたくなっていた。

彼が女性達の会う目的は一つだ。欲望を満たす、ただそれのみ。
それ以上の感情は初めは持ち合わせてはいなかった。純粋な興味と欲から動いていたのだ。

まあ、それにはいくらかの準備が必要であったが、世の中そんな男の希望を手助けしてくれる商売がきちんと存在していた。レンタルのブランドスーツ、レンタルのアクセサリー、レンタルだけどレンタルに見えない個人契約方式のレンタカー。
外見だけならただの男も、すぐにリッチなセレブになれるのが今の世の中なのだ。
もちろん、田辺の容姿が優れていて、見栄えとある種の雰囲気を醸し出せている事は大いにプラスにはなっていた。普通の格好でも十分に行けるだろうが、サイトがサイトだけに十分すぎる位の準備が必要なのだと彼は彼なりにはしっかりと考えていたのだ。それに、あの時あの自称会社役員がおかしなことを言いだしたおかげでバカラで儲けた金をまるまる手元に残す事が出来ていた為、軍資金はそろっていたからそちらの問題がなかったから、田辺は容易に実行する事が出来た。

田辺がそんな行動を取ろうとしたのは、実に自然で素直な衝動からだ。
いい女を抱いてみたい。ただそれだけ。

だいたい、そこらへんに歩いているただの女では無く、誰もが振り返るようなとびきりの女をはべらかしたいと思うのはどの男も同じ

だろう。それに、これは、ただ金を払って飲み屋の姉ちゃんと話すよりも、ずっと興奮する事だし面白い事だった。どんな娘が来るのか分からないドキドキ感と、自分の幻想の財産をちらつかせる事で女を手なづけさせられる優越感とを味わいながら、しっかりとその女の味をも堪能できるのだから比べようもないのだ。おいそれと止められるはずは無かった。

そうして田辺は、その手で幾度も知り合いになった女を抱いては、適当な理由をつけて捨てていた。

初めは確かに金はかったのだが、幾度となく女性達と会い、それに慣れてくるとやり方次第で逆に金が転がり込む場合がある事を知った。

適当に理由をつけて金を引っ張りだす術を男は自然と身につけたのだ。

女は惚れた相手を無防備に信じきる輩が実に多い。

男が見せる信頼は形だけのものにもかかわらず、このサイトに来る女性の何人かはすんなりと受け入れ信じてしまうのだ。確かに、ここの会員のほとんどはれっきとしたセレブレティな訳だからブランド力はあるとは言え、男の細かい所など見る事も無くそのまま受け入れるようなお頭の弱いインスタント思考な女がまあ結構いたのだ。もちろん、すぐに見抜いてくる女もいた。そんな女はその場で別れてうやむやしするし、第一おいそれと普通の人間がこのサイトにアクセス出来る訳が無いのはその女達も知っているのだから、それをごり

押せば何の問題も起きはしなかった。

そして、この日も田辺はそんな女の一人に目をつけて、約束を取り付けたわけである。

彼は胸ポケットから煙草を取り出し、立ち止まって火をつけると、吐き出す煙に音の顔を思い浮かべるとまた歩き出した。会う前はい

つもそうしないと、顔を見合わせても分からなくなるから大変だ。今では、たまにしか会わないとは言え四人の女と同時進行しているから、女達の名前を整理するだけでも大変なのだ。これ以上増やしておさまりがつくのだろうか、なんて思いも一瞬浮かんだが、それよりもただ、新しい刺激の予感に本能を満たせる事の興奮がそれを上回っていた。

それと同時に、どの女も自分の事を金持ちのボンボンだと信じて疑わない事実を思い出して、おかしさがこみあげてきて笑いそうになったが、彼はすれ違う人の目を気にしてそれを何とかをこらえた。

「俺の中身には、どこにも金持ちのかけらすらないのに。あいつらそれを真に受けてやんの」

田辺は借り物のイタリア製の革靴のかかとを鳴らしながら歩くと、にやにやと顔をゆがめた。考えてみればスーツくらい買ってもいいのだけど、レンタルのブランド物の方が何となく自分にしっくりくる感じがするし、色々面倒臭くないからな。

まあ、身につけているものがパンツ以外すべて自分のものではない事実が、偽物の存在である今の自分にお似合いだと思うのは、無意識に出ている彼なりの意地なのかも知れなかったが、田辺自身には自覚は無かった。彼が考えている事は、今をどう楽しく、そしてメッキがはがれないようにするかと言う事だけなのだから。

待ち合わせの場所であるコンビニが見えてくると、田辺は近くにいるであろう人間に目を配らせ、警戒するかのように辺りを見回した。もう暗くなってはいるが、繁華街に近い裏通りにあるこのコンビニの周りには近くで働いているだろう女達や、外国人風の男など、様々な人間が歩いていた。ビルとビルの間にある小さな店の明かりはまるで蛾を呼び込むように人を引き付けている。男は女達との待

ち合わせ場所としていつも特定のコンビニを使用していた。駅をはさんで東に三か所、西に二か所、他の女とバッティングしないように彼なりに考慮しているつもりらしいが、同じ街で済まそうとしているところが彼の思考の限界なのかも知れない。そこまで深くは考えていないのだ。

さて、そんな彼がもうすぐコンビニにさしかかろうとした時、反対側から一人の男が歩いてくるのが目についた。

田辺と同じくらい背が高く、同じようなブランド物のスーツを身に纏い、同じようなイタリア製の革靴をリズム良く鳴らしながら、彼の方に近寄ってきていた。コンビニや隣り合う飲み屋から漏れる明かりにその横顔を照らされて、田辺にはその男のシルエットがはっきりと目に映っていた。

そう、目の前を歩いていたのはあの男であった。

すべすべの額や高く通った鼻筋は夜になっても少しの脂も浮いてはおらず、口元は爽やかそのものと言う感じでほほ笑んでいた。優しげな眼もとはどこを見ているか分からない感にいではあったが、店の明かりに照らされてその魅力をさらに増していた。社交界に出てきそうな、映画のワンシーンを飾れそうなジェントルマンみたいだ。

田辺はその男を見た瞬間、一瞬自分を見ている気がした。

整えられたファッションや身ぶりが、あまりにも自分と似通っている。同じようなシルエットであり、同じ系統のルックス、年もそれほど変わらないか向うの方が若いのかもしれない。田辺の直感では、前から向かってくる男は、まぎれもなく金持ちの匂いがする正真正

銘の人物であった。

しかし、冷静に考えてみれば今の自分だって見た目は前から歩いてくる男のそれと変わりはないのである。だから、なにも卑屈に思う事もなければ気負う事も無いし、向こうが自分の素性を瞬時に見分ける事も難しいのだからただ「運送会社の坊ちゃん」を演じていれば問題はない。なにも通りがかりの人間に張り合う事もないのだ。田辺は鼻で笑いながらそう思った。

バカバカしいや。

たとえ相手が金持ちだろうと一眼見ただけで自分がただのドライバーであるなんて分かりっこないのだし、余裕をかまして歩いていればそれだけ信憑性も増す訳だ。どんなに着飾ってもおどおどしていたらメッキが次々にはがれていくと言う事は、田辺にはよく分かっていた。それに、もしかしたら、あの男も自分と同じように金持ちの振りをしているだけかもしれないじゃないか。そう考えて、改めて男を見直すと、自分の方があらゆる面でイケているかもしれんとさえ思えてきた。

もうお互いにコンビニの両端に差し掛かりながら、田辺がそう思って若干見下げる感じで、自信を顔に張り付ける様にしてその男を見た時だった。

田辺の目に、男のある一点が突然の自己主張をして飛び込んできた。

田辺は思わず立ち止り、尚も歩いてくる男とすれ違うまで、ただ、ある一点を目で追っていた。

男の顔でも、男のスーツでも、男の川口でも無い、ある一点を見送りながら、田辺は自分のすぐ横を通り過ぎていく男を目で追い、そ

して、後ろ姿を見送った。あまりに一瞬のようで、とても長い時間が過ぎたような感覚が、開け放たれたままの自動ドアの前にいる田辺を取り巻いて、その思考を吐きたてていた。

あれは・・・・本物だ。

田辺はさっきまで自信に満ちていた顔を青白くさせると、コンビニから出てきた男の客にどかされる形で隅にはじかれた。力の入らない足は今にもへたり込みそうではあるが、田辺はコンビニの窓の外に設置されているたばこの自動販売機に凭れてそれをこらえた。

頭の中にはさっきの映像と共に、心の底からわき上がってくる本能的な劣等感が渦を巻いていた。

一瞬でやられるほどのインパクトを、あのジェントルマンは持ち得ていた。

田辺が持ち得ないものを、あの男は持ち得ていたのだ。

田辺がどうあがいてもレンタルできない本物の力を、あの男はしっかりと自己主張させながら、しかも街の中を悠々と自信を持ちながら歩いていたのだ。いくら自分がその外見を取り繕い、だまそうとしても、結局最後の最後の所では本来の自分をさらけ出さなくてはならない。

それは、どうあがいても逃れられない事であるのだけど、田辺にはそれを目の前から受け止める自信が伴っていなかった。

女達を手玉に取ろうとも、自分自身への劣等感は拭い切れるものでも無い。

それがなかったなら、今までの自分はもっとましな、いや素晴らしい人生を歩んでいた事であろうが、実際には本物の力がなかったが為に、そして、それに伴う自信を手に入れる事が出来なかったが為

にこんな人生を歩んできてしまった、その事実が、あの男を見た瞬間に田辺を取り巻いたのだ。
そして、目の前を通り過ぎたあの男ほどの実力は、自分ではどうなるものでも無いんだという現実が、田辺の幻想を吹き飛ばした。
いくら繕っても、自分は自分以上にはなれないんだな。
田辺はそう思って、またタバコを取り出すと火をつけると、深く煙を吸い込んだ。
もう、そこに女の顔は浮かんでやしなくて、ただ、この街の影とも言うべき裏通りの光景が好かされるだけだった。すっかり、女と会う気分では無くなってしまった。
今自分に起きているこの喪失感を、いったい何が埋めてくれるんだろうか？
この本物の喪失感を、いったい何がうめてくれるのだろうか？
それは、本物の何かなのだろうが、今の田辺には皆目見当もつかなかった。
田辺はあの男が消えていった、深い闇の方に目を凝らしながらタバコを揉み消すと、首を力無くうなだれながらさっき来た道を戻っていった。女からの連絡であろう携帯電話が鳴ったがそれも無視して、田辺はただ、暗闇の中に消えていった。
あの男はこの東京を歩いている。

もし男に目的があるのなら、それはきっとくだらない事なのかもしれない。まあ、男にとっては真剣なのかも知れないだろうけど、その真剣さはきっと周りには伝わらない事だろう。

もっと、自分を大切にしようぜ、って言われそうだ。

ただ、男の意思とは関係ないであろうが、男を目撃した事で何かを見つけた人間がいると言う事は、この広大で腐って異臭を放つほどにめちゃくちゃ人がいるこの都市の一部の風景として確かに刻まれる事であろう。記録を更新するでも、記憶に深く刻みつけるでもないが、風景の一部として男を見た人の心にかすかな影響を与えた存在として、男はこの街にいる訳だ。その事が何を示すかと言えば、いなくても何が起こるでも無い人はこの東京にはごまんといるように思えて、実は男のように風景を形作っているという事である。もちろん、それは男と同じ様に無意識の行動であるのだろうが、それでも言えるのは、この街にいる以上、この街の風景としている以上、その人はここにいる存在を許されると言う事だ。その街の風景としてなら、どんな人でもこの街は受け入れてくれる。

ただ、それ以上を望もうとするなら、この街はそれなりの仕打ちを向けてくるのだ。

それだけの何かがその人に起こるし、もしかしたらそれ以上の何かをその人に及ぼすかも知れない。

そして、不幸な事にこの街には自分以上を求める人間が集まってくるのだ。

何故、人は自分以上を求めたがるのか？それは分からない。

しかし、考えてもらいたい。あの男が、この街を歩くときに自分以上を求めていたらいったいどうなっていたかと言う事を。

男はきっと歩く事すら出来なかったであろう。

それはいったいどういう事か。
それはすなわち、男が自分以上を求めようとして歩いていたならば、この街の風景にすらなれなかったであろうと言う事だ。要するに、この街から存在することを拒否されると言う事なのだ。

男はそこを歩いた。

誰もがそうだろう。いつかどこかで歩く訳だ。
そして、風景になる。この東京と言う大きな塊の風景に。ここは、昔から今に続くまでそれを繰り返してきた訳だ。その塊を大きくさせながら。

しかし、これだけは変わらないだろう。

街がその存在を許すとき、人はいつでもそこにいられるわけなのだ。

（後書き）

この男に会ってみたいと思う方！

感想下さい！

彼を探して、伝えますんで（笑）

読んでくれてありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6246i/

東京ポロリ男

2010年10月9日11時16分発行